岩手県立総合教育センター教育研究(2002)

主題研究

共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する研究

(第２報)

教科領域教育室
福　士　幸　雄
大　村　淳　也

○　研究協力校
大迫町立大迫小学校
花巻市立南城中学校

研究の概要

この研究は、共感的理解を伴うような異文化との交流や体験活動の工夫をとおして、共に生きていくための資質や能力を育成する国際理解教育の在り方を明らかにするものである。

本年度は、２年次研究の完結年次として、次の成果を得た。

① 参加型学習を取り入れた異文化との交流体験活動について児童生徒のふりかえりの状況から、意識及び態度に関する変容が見られた。

② 事前事後の調査から、三つの構成要素に変容が見られた。

③ これらのことから、参加型学習を取り入れた異文化との交流体験活動は、児童生徒の共に生きていくための資質や能力の育成に効果があったことが確かめられた。

キーワード：国際理解教育　参加型学習　多元性の理解　コミュニケーション能力　アクティビティ　ふりかえり

Ⅰ　研究の目的

今日、我が国では、様々な面で異文化との接触や国際化が進展し、国際社会に生きる日本人の育成が重要な課題となっています。こうした背景から、異文化との共生を主軸にした国際理解教育の取り組みが求められています。

しかし、これまでの国際理解教育では、他国の生活様式の理解、異文化理解、他国との協調など、主に文化理解を中心とした指導となることが多く、国際社会に生きる力としてはたらく資質や能力を育てる指導が十分とはいえませんでした。そのため学校では、異文化交流や体験などの活動は行われているものの、児童生徒が互いの文化の違いを知ることにとどまっていると考えられます。

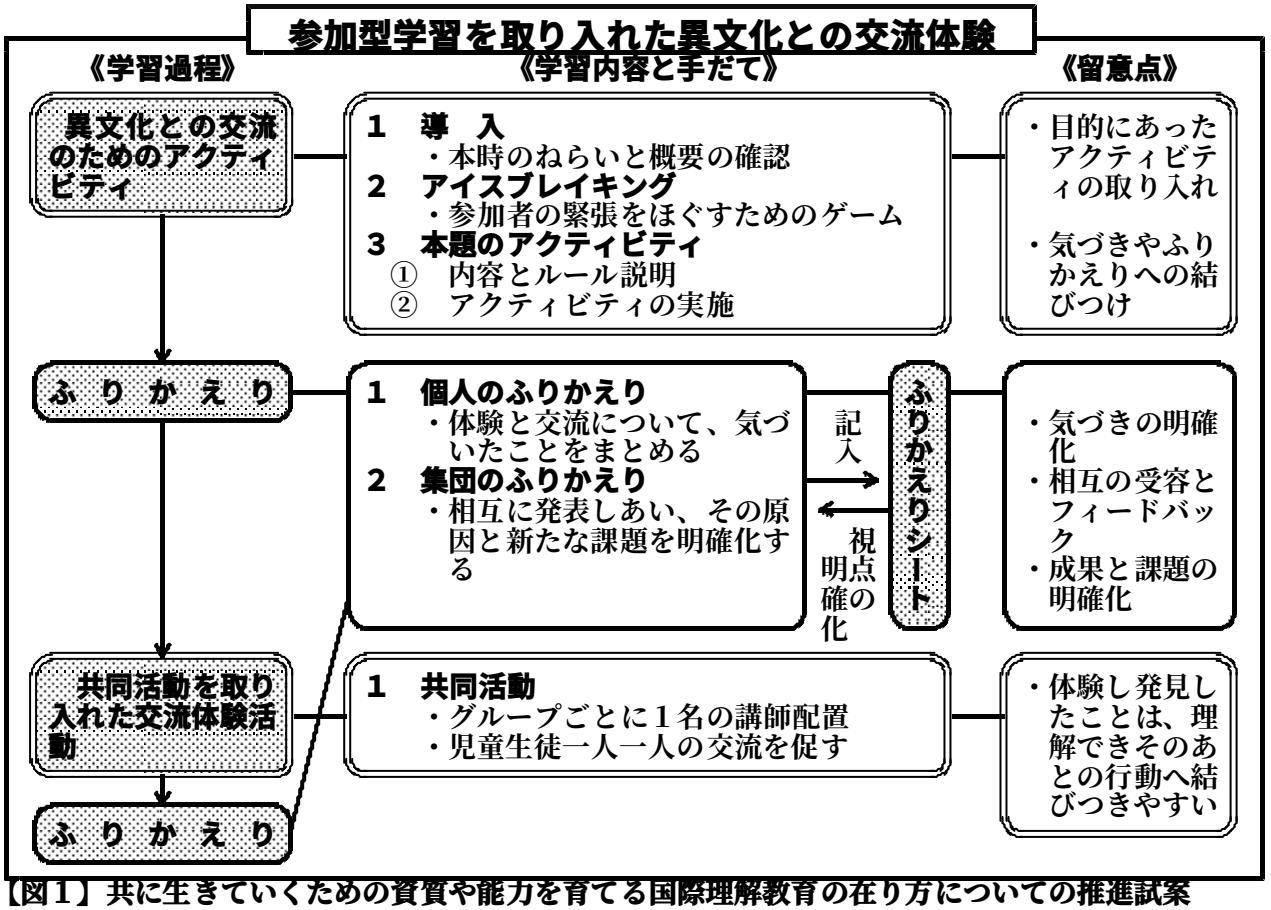
そこで、この研究は、共感的理解を伴うような異文化との交流や体験活動の工夫をとおして、共に生きていくための資質や能力を育成する国際理解教育の在り方を明らかにし、学校における国際理解教育の指導の充実に役立てようとするものです。

本年度は、２年次研究の完結年度として、前年度に作成した推進試案をもとに、実践化にむけて指導実践計画を作成して指導実践を行い、手だての有効性について確かめました。

Ⅱ　研究結果の分析と考察

１　共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する推進試案

昨年度の研究において、基本構想、実態調査の分析及び推進試案作成の視点に基づいて、推進試案を次の【図１】のように作成しました。



【図１】共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての推進試案

2　推進試案に基づく指導実践及び実践結果の分析と考察

(1)　指導実践計画の概要

推進試案「参加型学習を取り入れた異文化との交流体験活動」に基づき、研究協力校である大迫町立大迫小学校、花巻市立南城中学校のそれぞれにおける指導実践の計画を作成しました。その概要については次の【表１】のとおりです。また、交流体験活動に必要な外部講師については、関係諸機関の支援を得て協力を依頼しました。

【表１】指導実践計画の概要　　ACT ＝アクティビティ

校種	次	活動内容
小学校	第１次	1 アイスブレイキングとガイダンス 2 ACT1:『ジャガイモ君はお友達』 3 ふりかえり
	第２次	1 ACT2:『みんながいっている』 2 ふりかえり 3 ACT3:『異文化バーチャルツアー』 4 ふりかえり
	第３次	1 アイスブレイキング 2 交流体験活動:『ジグソー！』 3 ふりかえり
	第４次	1 交流体験活動：『遊びましょっ！』 2 ふりかえり
	第５次	1 交流体験活動：『私の日本』 2 ふりかえり

校種	次	活動内容
中学校	第１次	1 アイスブレイキングとガイダンス 2ACT1:『ゴーフィッシュ』 3ACT2:『フォトランゲージ』 4 ふりかえり
	第２次	1ACT3:『よい聞き手話し手』 2 ふりかえり 3ACT4:『目は口ほどに・・・』 4 ふりかえり
	第３次	1 アイスブレイキング 2 交流体験活動:『私はピカソ？』 3 ふりかえり
	第４次	1 交流体験活動：『日本文化を考える』 2 ふりかえり
	第５次	1 交流体験活動：『知ってること知らないこと』 2 ふりかえり

(2)　実践結果の分析・考察の内容と方法

共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての試案の妥当性について、次の【表２】のように検証していくこととしました。また、「共に生きていくための資質や能力」を育成するうえで必要な三つの力が培われた児童生徒の姿については【表３】のように考えました。

【表２】検証計画

検証内容	検証方法
①　児童生徒の学習活動の状況	・児童生徒のふりかえりシートの記述内容について、データの類型化に基づくコーディングにより分析・考察を行う
②「共に生きていくための資質や能力」を構成する三つの力の変容状況	・指導実践の事前と事後に実施する調査紙による調査の結果をもとに、事前事後の比較を行い、「知識を再構築する力」「視点を転換する力」「異文化に対処する力」のそれぞれの変容状況について分析・考察する

【表３】三つの力が培われた児童生徒の姿

力	児童生徒の姿
知識を再構築する力	・各教科・領域の学習の既習事項をつかって、自国文化と異なる文化を対等なものとしてとらえようとする
視点を転換する力	・異なる文化をもつ人々の立場を自分なりに考え、相手の立場を尊重して交流する
異文化に対処する力	・異なる文化をもつ人々と、自分なりの工夫により交流し、意思疎通を図ろうとする

(3)　指導実践の概要

小学校における指導実践については、次の【資料１】にその概要を示しました。なお、時数配当は２単位時間を連続として、計５回の実践を行い、総時数は10時間です。また、対象は第５学年、１学級35名の児童です。

中学校における指導実践については、【資料２】にその概要を示しました。なお、時数配当は小学校と同様に２単位時間を連続とした５回の実践であり、総時数は10時間です。

また、対象は第３学年、３学級83名の生徒です。そのため、活動場所は体育館としました。

資料１】 小学校における指導実践の概要

第 １ 次

アイスブレイキングとガイダンス

『こんな人いませんか』

1 ルールの確認

a 必ず自己紹介をし、相手の名前を聞く
b シートの質問事項をうめる
c １問ずつ別の人から聞く

2 アクティビティの実施

始まると同時に室内のだれかれ問わず、次々と相手をかえインタビューしていた

3 アクティビティの終了
4 学習内容の概要説明
5 学習ルールの確認

お話をするときに、相手にされて困ることは何だろう

6 自由発言

P1 ブーイング
P2 私語をする
P3 無視する

7 まとめ（傾聴の三原則）

・体を相手に向けて聞く
・相手を責めない
・心で聞く

一人一人の大切さへの気づき

『ジャガイモ君はお友達』

8 ジャガイモの配布
9 ジャガイモの観察

P4 へこんでる P5 少し青みがある
P6 キズがある P7 皮がむけてる

10 名前をつけ、物語（生い立ち）を考える

11 友達としてのジャガイモの紹介

12 ジャガイモとの別れとふりかえり
13 友達のジャガイモとの再会

14 ふりかえり

P8 君のおかげで楽しかったよ
P9 すぐ見つかった、何かうれしい
P10 また会えてうれしかった

第 ２ 次

共通点と相違点への気づき

異文化バーチャルツアー』

1 学級を２つのグループにわける
2 ルールの確認

a 二部屋にわかれ、それぞれの国とする
b 学習カードにしたがい、行動様式を確認する
　Ａ国：明るく積極的だが身勝手な言動
　Ｂ国：暗く消極的だがていねいな言動
c 行動様式を練習する
d 相手国に交代で訪問する（三人ずつ）

3 移動
4 学習カードの配布
5 行動様式の確認
6 国名の決定

Ａ国：アッメリカ
Ｂ国：一周共和国

7 行動様式の練習

【Ａ国】１～３班

【Ｂ国】４～６班

8 相手国への訪問

9 グループごとのふりかえり

１班 文化も大切だけどＢ国はひどい
２班 Ｂ国はみんな暗かった
３班 Ｂ国はなぜ黙っていたのか
４班 Ａ国は明るく接してくれた
５班 責められてつらかった
６班 Ａ国とＢ国は仲良くしよう

第３次

導入とアイスブレイキング

自己紹介を聞き取ろう』

1 コミュニケーションスキルの想起

P1：体を相手に向ける。
P2：話す人の目を見る。
P3：あいづちをうって反応する。

2 外国人講師の母国語による自己紹介の聞き取り（氏名、出身地、趣味）

イギリス：英語　香港：広東語
韓国：韓国語　中国：北京語
ペルー：スペイン語　ハワイ：英語

3 聞き取り結果の確認

英語と韓国語は聞き覚えがあり、内容が把握できた
他の言語については、名前以外はほとんど聞き取れなかった
しかし、どの言語についても聞き取ろうとする姿勢が見られた

『バースディチェーン』

4 ルールの確認

生年月日順に全員で輪をつくる
講師と隣り合った児童の班に加わる

交流体験活動１

『ジグソー！』

5 ルールの確認

a 紙片を組み合わせ、四角形を完成させる
b 言葉を交わしてはいけない
c 制限時間は５分

6 アクティビティの実施

無言であるため、アイコンタクトやゼスチャーでさかんに意思疎通を行った班が時間内に終了した

7 ふりかえり

P4　はやくできたのは、身振り手振りで協力したから

8 ルール変更の確認

a 紙片が増え、完成する四角形も大きい
b 言葉を交わしてよい
c 制限時間はないが、早いほうがよい

9 アクティビティの実施

10 ふりかえり

P5　おそかったのは自分勝手だったから
P6　協力できたのではやかった
P7　講師の先生と仲良しになった

第４次

導入

自己紹介を聞き取ろう』

1 外国人講師の母国語による自己紹介の聞き取り（氏名、出身地、趣味）

カナダ：英語　タイ：タイ語

交流体験活動２

遊びましょっ！』

2 ６人の講師が体育館内で分散する
3 班ごとに講師から出身地の遊びを教わる
4 教わった遊びをいっしょに体験する
5 10分ごとに講師を替えて、合計６カ国の遊びを体験する

中国：あやとり
タイ：ハンカチ落とし
ペルー：ペルー式とおりゃんせ、人間綱引き
カナダ：ナンバー指名ゲーム
韓国：足相撲、韓国式蹴鞠
香港：香港式だるまさんが転んだ

〔ペルー式とおりゃんせ〕

〔人間綱引き〕

〔ナンバー指名〕

特に類似したものを依頼したわけではなかったが、ほとんどの遊びが日本で古くから親しまれているものに類似していた
児童も熱心に説明を聞き、楽しみながら取り組んでいた

6 ふりかえり

P1「だるまさんが転んだ」が他の国にもあっておどろいた
P2　外国の人と遊んでも楽しかった
P3　違う国にも同じ遊びがある
P4　言っていることがよくわからなかったけど、いっしょに遊べた
P5　目をちゃんと見て、楽しんでやることが大切
P6　外国の人とも仲良くできる

	第　５　次	備　考
導入	『傾聴の三原則の想起』 1 本時の学習内容の確認 2 傾聴の三原則の想起 	【講師について】 全５回の実践のうち、第３次から第５次まで講師を招いた。 各実践の講師陣は以下のとおりである。 ○＝参加
交流体験活動３	『わたしの日本』 3 学習内容の確認 a 講師の日本での体験談を傾聴する b 印象に残ったことや疑問に思ったことをシートに記入する c 疑問点を質問する 4 講師の体験談 ペルー：初めての雪について カナダ：カナダと日本との比較 香　港：初めての温泉体験について 中　国：正月の食生活の違いについて タ　イ：初めての雪のイメージについて ハワイ：プライバシーについて ［香港：温泉体験］ ［ハワイ：プライバシー］ 5 質問大会 P1　それぞれ主食は何か P2　食事の時に使う道具は何か P3　食事のマナーはどうか 講師の質問1 すしは手で食べるか、箸で食べるか 講師の質問2 日本そばの食べ方は 6 ふりかえり P4　日本で当たり前のことが、よその国ではそうでもない P5　いろんな国に、いろんな違いがある P6　別に文化が違っても大丈夫 P7　文化が違っていても「えーっ」とか言わないことが大事 P8　文化が違っても、友達だということはかわらない	講師の依頼については、花巻市企画生活環境部国際交流室および（財）花巻国際交流協会事務局の協力を得て、講師選定を行った。 また その際、可能な限り出身地の多様な講師を紹介してもらうようお願いし、この点について配慮をいただいた。 その結果、それぞれの講師の都合もあって、上記のような講師陣となった。 実践の内容については、講師依頼のための打ち合わせにおいて、その概略は説明したが、詳細についてはふれず、以下の事項について確認した。 ・遠慮せずに、思ったことを発言してほしい ・困ったことがあれば、いつでも担当者に相談してほしい ・生徒の言動について、失礼なことがあるかも知れないが理解してほしい ・共に学ぶという姿勢で参加してほしい 講師について配慮すべきことも考えられたが、どの講師も非常に前向きに活動に参加し、講師陣にとっても貴重な体験であったと考えられる。 事後の感想については、「いっしょに学べる活動が楽しかった」ことや、「単なる講演ではないことがよい」こと、あるいは「自分自身にとって貴重な体験であった」など、どの講師も肯定的に受け止めていた。

	第３次	第４次	第５次
中　国	○	○	○
香　港	○	○	○
ペルー	○	○	○
韓　国	○	○	－
ハワイ	○	－	○
イギリス	○	－	－
タ　イ	－	○	○
カナダ	－	○	○

資料２】中学校における指導実践の概要

第　１　次

コミュニケーションの必要性

『ローフィッシュ』

1 ルールの確認

a　無言で取り組む
b　班ごとにコインを取り合う
c　１回ごとに残ったコインと同数のコインが補充される
d　終了の合図まで繰り返す

2 アクティビティの実施
3 アクティビティ終了
4 取り合ったコインが何を象徴しているかの話し合い

T：ある程度残すと増えるもの
P1：資源　　P2：石油、石炭
T：自ら増殖するもの
P3：樹木、魚類
T：では、君たちは何か
P4：資源をとる国々

5 ふりかえり

P5：資源の保護には国際協調が必要
P6：お互いに言葉がなくてもゼスチャーなどで会話していた

先入観への気づき

『フォトランゲージ』

1 配布された２枚の写真の、隠された部分を想像する
2 班ごとに話し合い、結果をまとめて写真の空欄に書き込む

3 発表

写真a[予防接種]
→ほとんどの班が予防接種を想像
写真b[卒業記念写真]
→ほとんどの班が怪我や身体の損傷を想像

4 解答（正解写真の掲示）

写真aの掲示
→多くの班がうなずいて納得している様子
写真bの掲示
→意外な正解に驚きの声があがりざわついた様子

5 ふりかえり

P7：先入観があるため、間違った判断をした
P8：見かけで判断してはいけない
P9：偏見をもっている自分に驚いた
P10:外見だけで人を判断しないことが大切

第　２　次

コミュニケーションスキル

『よい聞き手話し手』

1 ルールの確認

a　班ごとに背中合わせに座る
b　指示に従って用紙を裁断する
c　無言で活動する

2 アクティビティの実施

d　用紙を半分に折り、左上角を切る
e　もう一度半分に折り、左上角を切る
f　もう一度半分に折り、右下角を切る

3 結果の確認

4 話し合い（結果を同じにするには）
5 再度アクティビティの実施
6 よい聞き手と悪い聞き手の例示
7 よい聞き手の条件の確認

P1：体を相手に向ける
P2：話し手の目を見る
P3：あいづちをうち、反応する

非言語コミュニケーションスキル

『目は口ほどに』

1 同じ単文を、指示した様々な声の調子で読み、班内でどの声かを推理する
2 正解を互いに発表しあう
3 指示されたしぐさを交代で行い、それから受ける印象を話しあう
4 ふりかえり

P1：思ったよりもコミュニケーションは難しい
P2：声だけでは聞き取りづらい
表情やしぐさは重要だ
P3：聞き手の聞き方が違うと、話し手の気持ちも違う
P4：相手の立場や気持ちを考えて会話することが大切
P5：相手を肯定的に受け止めたい

第３次

導入

『自己紹介を聞き取ろう』

1 コミュニケーションスキルの想起

P1：体を相手に向ける
P2：話し手の目を見る
P3：あいづちをうち、反応する

2 外国人講師の母国語による自己紹介の聞き取り（氏名、出身地、趣味）

中国：北京語　香港：広東語
ペルー：スペイン語　アメリカ：英語
イギリス：英語

3 聞き取り結果の確認

どの自己紹介にも聞き入り、聞き取ろうとする姿勢が見られた
特に英語は聞き慣れているせいか、的確に内容を把握していた
また、講師が日本語で補足した

4 グループに講師を迎える

交流体験活動１

『わたしはピカソ？』

1 ルールの確認

a　別室に掲示した絵を模写する
b　グループごとに交代で見てくる
c　無言で取り組む

2 グループ内の順番の決定

3 アクティビティの実施（言語なし）
（一人１分×15人）

無言であるため、ジェスチャー等を用いて役割分担等を確認し、スムーズに模写を進めていた

4 模写結果の掲示と評価

評価の高かったグループは、その理由として積極的にコミュニケーションを図ったことをあげた
言語ありで再度行うことを告げると、各グループで作戦の相談が活発に行われた

5 アクティビティの実施（言語あり）

6 模写結果の掲示と評価

積極的にコミュニケーションをとったグループの模写が高く評価された

7 ふりかえり

外国人であると意識せずに会話できた

第４次

導入

『自己紹介を聞き取ろう』

1.新しい講師の自己紹介

韓国：韓国語

2.聞き取り結果の確認

聞いたことのあるフレーズから出身地がわかり喜ぶ姿があった

交流体験活動２

『日本文化を考える』

1 ルールの確認

a　日本文化に関するアメリカの教科書の目次から作成したカードをグループごとに７位までランキングする
b　ランキングの規準は「私たちが伝えたい日本の文化」とする

2 アクティビティの実施

3 ランキング結果の発表

【生徒のランキング】（数字は選んだグループ数）
・生け花5　・三味線5　・歌舞伎5　・能5
・盆栽4　・浮世絵3　・俳句3

4 外国人講師グループのランキング結果

1 神道　2 生け花　3 三味線　4 書道
5 漢字　6 盆栽　7 漆器

5 それぞれのランキングから一つずつ項目を選択し、講師に説明できるよう準備

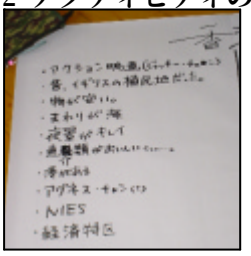
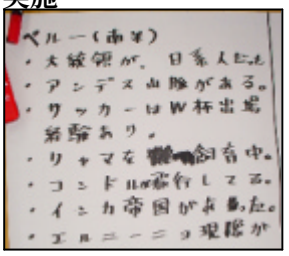
全グループが生け花を選択

6 説明

別室から花瓶をもってきたり、紙に図を書いたりして説明を行っていた
しかし、なかなかうまく説明することができず、逆に講師から説明をうけるグループもあった

7 ふりかえり

P1：自国の文化を知らないことに気づいた
P2：講師の先生のほうが日本の文化に興味をもっているし、知っていた
P3：説明の後、「もっと知りたい」と言われうれしかった
P4：外国の方と交流するには、まず自分の国の文化を知る必要がある

	第　５　次	備　考
導入	**自己紹介を聞き取ろう** 1 新しい講師の自己紹介 ハワイ：英語 2 聞き取り結果の確認 英語であるため、概略を理解しうなずく生徒が多かった	**【講師について】** 全５回の実践のうち、第３次から第５次まで講師を招いた。 各実践の講師陣は以下のとおりである。 ○＝参加
交流体験活動３	**『知っていること知らないこと』** 1 ルールの確認 a　グループに招く講師を決める b　招いた講師の出身地について、「知っていること」を模造紙に書き出す 2 アクティビティの実施   3 講師の助言 各グループ共に質疑がさかんに行われた。また、多くの誤解が指摘された 4 「知りたいこと」の書き出し 5 書き出した項目のランキング（上位３つ） 6 ランキング結果の発表と講師の助言 7 ふりかえり P1：たがいにわかりあえた気がする P2：わかっているつもりで違っていることがあった	

	第３次	第４次	第５次
中　国	○	○	○
香　港	○	○	○
ペルー	○	○	○
アメリカ	○	○	○
イギリス	○	―	―
韓　国	―	○	―
ハワイ	―	―	○

講師の依頼については、花巻市企画生活環境部国際交流室および（財）花巻国際交流協会事務局の協力を得て、講師選定を行った。
またその際、可能な限り出身地の多様な講師を紹介してもらうようお願いし、この点について配慮をいただいた。
その結果、それぞれの講師の都合もあって、上記のような講師陣となった。
実践の内容については、講師依頼のための打ち合わせにおいて、その概略は説明したが、詳細についてはふれず、以下の事項について確認した。

- 遠慮せずに、思ったことを発言してほしい
- 困ったことがあれば、いつでも担当者に相談してほしい
- 生徒の言動について、失礼なことがあるかも知れないが理解してほしい
- 共に学ぶという姿勢で参加してほしい

講師について配慮すべきことも考えられたが、どの講師も非常に前向きに活動に参加し、講師陣にとっても貴重な体験であったと考えられる。
事後の感想については、「これまでは、母国の文化等の講演が多かったが、今回の参加型学習は目新しく、より効果的な交流ができたのではないか」「招かれた講師も楽しく学ぶことができた」などであった。小学校の実践と同様にどの講師にも好評であった。

(4)　実践結果の分析と考察

ア　児童生徒の学習活動の状況　省略

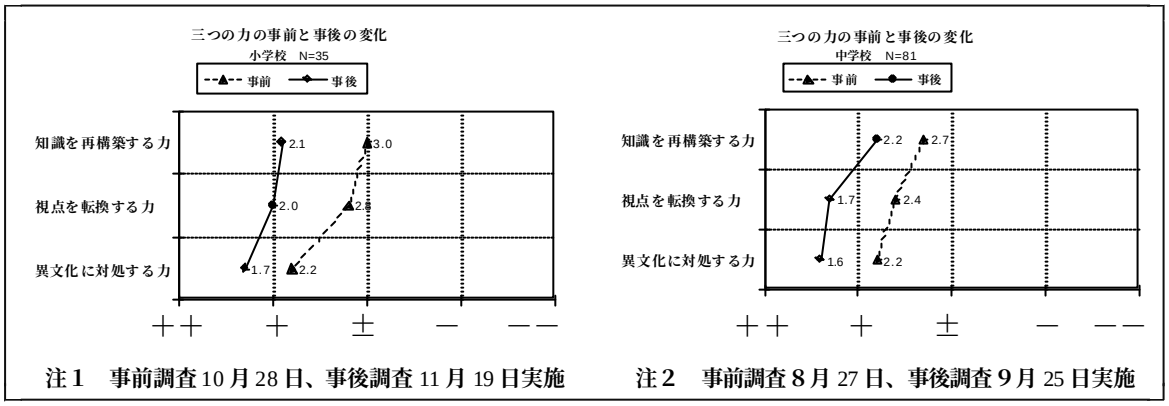
イ　「共に生きていくための資質や能力」を構成する三つの力の変容状況

「共に生きていくための資質や能力」を構成する三つの力の変容状況を把握するために、ＳＤ法を用いて事前と事後に調査を実施しました。調査の観点及び内容は次の【表４】のとおりです。

【表４】事前事後調査の観点及び内容

調査の観点	調査内容	
異文化をもつ人々との交流について、児童が抱いているイメージ	知識を再構築する力 「外国の文化を理解し尊重することは」	おもしろい ⟷ つまらない 正しい ⟷ まちがっている やさしい ⟷ むずかしい
５段階尺度 1　とても　＋＋ 2　どちらかというと　＋ 3　どちらともいえない　± 4　どちらかというと　－ 5　とても　－－	視点を転換する力 「外国の方の立場に立って考えることは」	必要である ⟷ 必要でない 重要である ⟷ 重要でない やりたい ⟷ やりたくない
	異文化に対処する力 「外国の方と交流することは」	好きである ⟷ 嫌いである 役に立つ ⟷ 役に立たない 良い ⟷ 悪い

調査結果について、その平均を求め、事前と事後を比較したものが次の【図２】です。



注１　事前調査 10 月 28 日、事後調査 11 月 19 日実施　　注２　事前調査８月 27 日、事後調査９月 25 日実施

【図２】三つの力についての事前事後の変化

このグラフから、小中学校ともに、構成要素の三つの力はすべてプラスに変容したことがわかります。

小学校においては、特に「知識を再構築する力」が最も大きく変容しています。これは、実践をとおして、児童一人一人の異なる文化に対する意識やとらえ方が大きく変化したことを示しており、異なる文化をもつ講師との交流体験活動をとおして、異文化および異文化をもつ人々との交流に対する抵抗感が薄れたことを意味していると考えられます。

中学校においては、特に「視点を転換する力」が最も大きく変容しています。これは、実践をとおして、生徒の多くが異なる文化をもつ人々との交流によって、相手の立場や文化についての理解が深まり、異なる文化をもつ講師との交流において、相手の立場を尊重しようとする意識が高まったからであると考えられます。

そうした一方では、小中学校ともに「異文化に対処する力」については大きな変容が見られませんでした。これは、事前調査の段階でプラス傾向が強かったことが一因であると考えられます。しかし、事前の平均値が高かった背景には、異文化交流についての価値や必要性を多くの児童生徒が理解していたものと考えられます。そして、実際に異なる文化をもつ人々と意思疎通を図るためのコミュニケーション能力を育成するためには、年間をとおした継続的な取り組みが必要であると考えます。さらに、小学校においては異なる文化に対する抵抗感の排除を前提とした異文化交流が、また中学校においては国際協調の必要性を前提とした異文化交流に留意することが必要であると考えます。

Ⅲ　研究のまとめと今後の課題

本年度の研究の目標は、共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての推進試案に基づいて指導実践計画案を作成し、指導実践とその分析・考察をとおして、共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方について明らかにすることでした。

したがってここでは、本年度の研究において明らかになったことについて、成果と課題の二点からまとめることとします。

1　成　果

(1)　異文化との交流を促すためのアクティビティによる参加型学習を実施することは、異文化をもつ人々との交流についての抵抗感を弱めることに効果がある。

(2)　学習の各段階において「ふりかえり」を設定することは、それまでの漠然とした気づきを明確にさせるうえで効果がある。

(3)　異文化をもつ人々との共同活動を組み入れた交流体験活動を実施することは、多元性の理解とそれに基づくコミュニケーション能力の向上のために効果がある。

2　課　題

(1)　小学校においては、異なる文化に慣れ親しむことを目指した、年間をとおした継続的な取り組みの在り方を考えていくことが必要である。

(2)　中学校においては、異文化交流における国際協調の必要性等に留意した、年間をとおした取り組みの在り方を考えていくことが必要である。

以上のことから、各教科・領域で獲得した国際理解に関する知識を実感をもった理解に導くための異文化をもつ人々との共同活動、および学習の各段階における気づきや相互の受容を促すような「ふりかえり」による異文化との交流体験活動を取り入れていくことは、共に生きていくための資質や能力を育てることに効果があるものといえます。

【主な参考文献】

岩手県教育委員会「小中学校指導資料　国際理解教育の手引き―教科・領域指導への提言―」
岩手県教育委員会　1987

W・フォン・ラフラー＝エンゲル　編著「ノンバーバルコミュニケーション」
大修館書店　1981

井上　祐吉／堀内一男　編　「中学校国際理解教育の進め方」　教育出版　1994

北　俊夫　著　「環境と国際理解の教育」　東洋館出版社　1996

鍋倉健悦　著　「異文化間コミュニケーション入門」　丸善出版　1997

宮原修　編著　学校変革実践シリーズ７「国際人を育てる」　ぎょうせい　1998

有園格・小島宏　編著　学校の創意工夫を生かす「総合的な学習の時間」の展開３
「国際理解、福祉・健康の展開」　ぎょうせい　1999
教育開発研究所　1999

佐藤群衛　著　「国際理解教育　多文化共生社会の学校づくり」明石書店　2001

岩手県国際理解教育研究会議「小学校における国際理解教育の在り方について」　2001